



アメリカは英語の国でしょう？

複数言語社会に 生きるということ

山本 昭 Yamamoto Akira (カンザス大学教授)

首都ワシントンのすぐ隣のヴァージニア州のホテルでのことだ。広い会議場では司会者が keynote speech をするアメリカの NPR (National Public Radio) の重役である男性の経歴を紹介し、彼の英語になまりがないことにいたく感心したと付言していた。この男性は Spanish speaking の家庭で育ち、彼自身は bilingual だ。会議では、発言者の一人ひとりがさまざまななまりを英語に添えていた。スペイン語なまり、アラビア語なまり、中国語の響き、日本語のアクセント、韓国語のなまり、などなど。

確かにアメリカは英語の国であるが、「共通語」としての英語に種々の言語がその色を濃く投げかけている。最初に述べた会議は Heritage Languages in America の Second National Conference であった。会議の副題の Building on Our National Resources が広い意味を含み得るように、自分たちの母語を伝え続けようとする移民の人たち、その言語を研究したり教えたりする人々、外国語を national defense のために使おうとする military の人たちと、出席者はさまざまであった。目的は違っても、共通するものは言語に対する強烈な興味と熱意だ。今回はそれらの人々に、Native Americans (Hawaiian と Pacific Islanders, Eskimo, Alaskan Natives, American Indians) が加わり、アメリカ言語界の複雑さと重層性をますます際立たせた。

言語と文化の diversity を大切にしようとする動きが



アリゾナ大学でのアメリカ先住民語の教師のための夏期学校の風景

大きくなってきた半面、英語を州の共通語として立法化しようとする動きも強くなってきている。アメリカではこの2つの傾向が揺れ動きながら進んできていると言ってよい。その後ろ楯となる思惑があるのも当然で、diversity を促進する人の間でもその意味合いは異なる。会議の副題の 'resources' には、アメリカの持つ種々の言語を国に役立てようという意識がみられる。どちらかと言えば、言語を何か目的を果たすための役に立つ「道具」とする見方であるが、それに反して、主題である 'heritage' には、言語を自分の大切な一部分として守っていこうとする気持ちが見られる。heritage と resource, どちらの言葉も「価値あるもの」という点では同じであるが、その含むものは微妙に違っている。

「英語対多様言語」の2つの傾向がある国で、自分の言語を持ち続けようとする意味は何か。そして、どのようにして持ち続けていけるのか。これらの点について、次回から検討してみよう。

表紙写真 について

ランカスターのこいのぼり

鳥飼 慎一郎 Torikai Shinichiro (立教大学教授)

イギリスは移民によって構成されている国である。こう書くと、アメリカのことではないか、と驚くかもしれないが、イギリスのことである。紀元前の昔より、ヨーロッパ大陸から次々とさまざまな民族が渡って来たし、産業革命以降は、世界各地のイギリスの植民地から様々な人々がイギリスにやって来た。イギリスに来たからには、イギリスに同化し、英語を話し、イギリスの歴史を学び、女王陛下に忠誠を誓うべきであると考えるむきも大変根強いが、その一

方で、イギリス国内の多文化を早いうちから子どもたちに紹介し、様々な文化に触れさせようとする試みも、また盛んである。

2001年4月より、1年間、イギリスのランカスターに家族全員で滞在する機会を得たが、早々に、息子が通っていた小学校から、日本のこどもの日を紹介してほしいとの依頼を受けた。慌てて紙でこいのぼりを作り、こどもの日の意義とその祝い方を説明しに行った。その時持参したにわか作りの紙のこいのぼりを、

先方はたいそう気に入った様子で、翌週訪ねていくと、写真のようにイギリス製のこいのぼりが何匹も教室内を泳いでいたのである。しばらくすると、折り紙の講習会もやってほしいとの依頼も受けた。廊下には何ヶ国語もの言葉で、あいさつが紹介されていたのも印象的であった。イギリスに同化することを強く求めるイギリスと、他の文化を早いうちから子どもに紹介しようとするイギリスの2つの面を見た思いである。

